

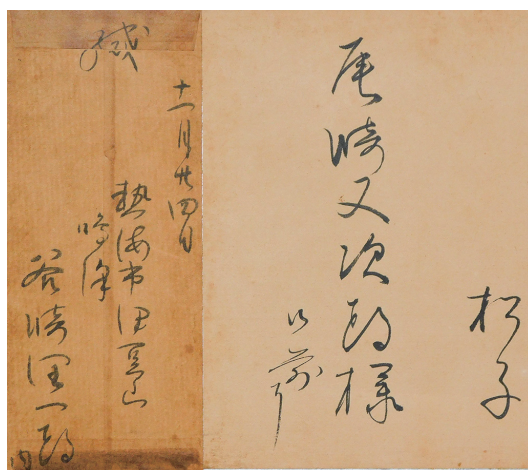
# 生 *Seikatsu Bunkashi* 史 生活文化史

<史料館だより>

- ◇正寿寺所蔵の六字名号について…………… 岡村 喜史 (2)
- ◇江戸時代の正寿寺 (3)
- 本山から授かった歴代門主の真影…………… 大国 正美 (5)
- ◇新着資料紹介
- 谷崎潤一郎夫人・松子からの書簡…………… 道谷 卓 (8)
- ◇深江文化村居住ワルターについて…………… 有吉 康德 (10)
- ◇深江物語 (14)
- 本庄小学校の話 (2) 校歌…………… 森口 健一 (13)
- ◇深江の心象風景 (5)
- 深江の水と文化村の景観…………… 岡田 茂義 (19)
- ◇史料館この一年…………… (23)
- ◇史料館日誌抄・資料寄贈者ご芳名…………… 道谷 卓 (24)

2025.3.31  
NO.53

文豪・谷崎潤一郎夫人の松子の書簡で史料館に寄贈を受け、1階壁面に展示している。宛名は、谷崎の代表作『細雪』にも登場する神戸の寿司職人・尾崎又二郎である（本誌8ページ参照）。松子の筆跡は、谷崎の署名によく似ており、「内」という字がなければ谷崎が書いたものと見間違えるほどである。



神戸深江生活文化史料館

# 正寿寺所蔵の六字名号について

岡村 喜史

## はじめに

今年の二月五日、正寿寺の住職が西本願寺に持参された六字名号を拝見したところ、本願寺第八代蓮如筆と確認できた。そこで、この六字名号を蓮如筆と判断した根拠とともに、蓮如と名号について紹介しておくこととする。

## 一、浄土真宗の名号本尊

浄土真宗を開いた親鸞は、名号を本尊として礼拝したことが知られている。

『浄土真宗辞典』<sup>(1)</sup>によると、名号とは「一般にすべての仏・菩薩の名前をいう」とし、「浄土教では、とくに阿弥陀如来の名を指し、嘉号・徳号・尊号などともいう」と解説している。

浄土真宗では、「南無阿弥陀仏」の六字名号、「南無不可思議光如来」の九字名号、「帰命尽十方無礙光如来」の十字名号がよく使用される。また、浄土真宗を開いた親鸞自筆の名号としては、六字名号と十字名号とともに、「南無不可思議光仏」の八字名号が存在する。さらに親鸞は、名号のことを「方便法身尊号」と呼んでいることから、浄土真宗では正式にはこの名称が使用される。

本願寺第三代覚如は、京都東山の太谷に営まれた親鸞の墓所

に十字名号を安置してこれを本尊とし、寺院化を進めて「本願寺」と称した。

このような浄土真宗の名号に対する考え方を受けて蓮如は、浄土真宗では名号が尊重されるとして、

一、他流ニハ、名号ヨリ木像ト云ナリ。当流ニハ木像ヨリハ絵像、  
絵像ヨリハ名号ト云ナリ。<sup>(2)</sup>

と言った。

## 二、蓮如の名号

蓮如は、康正三年（一四五七）に本願寺を相続すると、近江国南部の村に金字十字名号を授与して本尊とし、次々と道場を創建していった。

ところが、これに対して比叡山は、十字名号の中に書かれている「無礙光」という言葉について、本願寺は社会秩序を乱す行為をしても最後に名号を称えれば阿弥陀如来によって救われると説き広めている「無礙光宗」として非難し、寛正六年（一四六五）の一月と三月の二度にわたって比叡山の衆徒が太谷本願寺を破却した。

蓮如は、この事件以後基本的には金字十字名号を新たに授与することを取り止めた。そして自身で紙に書いた墨書六字名号を授与するようになった。

蓮如は、生涯を通じて名号をたくさん書いた。そのことは蓮如の在世中にもよく知られていたようで、蓮如の門弟である空善は次のような話を残している。

一、アル時仰二、オレホト名号カキタル人ハ、日本ニアルマシキノ、ト仰候キ。トキニ美濃殿、三国ニモマレニアルヘク候、ト申上タマヘハ、サヤウニアルヘシ、ト仰候キ。マコトニ不思議ナル御事也。(3)

これによると蓮如は自身で、自分ほど多くの名号を書いた者は日本にはほとんどいないだろうと言ったところ、その場に居合わせた門弟の美濃（慶聞房龍玄）は、インド・中国・日本の三国でもほとんどいないと答えたということである。

蓮如はどれくらいの名号を書いていたのかについては、蓮如の十男である実悟が編集した「本願寺作法之次第」によると、

一、蓮如の御時は、廿五日御齋前に名号を三百幅まであそはされ候と注たる物に御入候き、然ハ廿八日・十八日御齋前にも、百幅、二百幅、名号を被遊たる事二候間、実如の御時又同前に御入候き。(4)

とあり、二十五日の御齋前に一日に三〇〇幅の名号を、二十八日・十八日の御齋前に一〇〇幅、二〇〇幅の名号を書いたとされている。二十五日は親鸞の師である法然の月命日にあたり、二十八日は親鸞の月命日、十八日は蓮如の父である存如の月命日にあたる。それぞれの命日に仏事が催されて、その時に参つてくる人々のために、御齋（午前中の食事）の前に名号を書いて準備をしていたことになる。



写真 1 蓮如筆六字名号（正寿寺蔵）

このように蓮如は、多くの名号を書いていたことが記録から知ることができ、各地に蓮如筆の名号が残されている。ただ、寛正六年に比叡山から金字十字名号について非難されていたため、自身で書いた名号は六字名号が多く、一日に一〇〇幅、三〇〇幅というほどたくさん書いていたこと

から、そのほとんどが草書体である。

先の「本願寺作法之次第」にもあるように、蓮如の次の第九代実如も蓮如と同じように名号を書いていたことがわかる。

各地に残されている室町時代後期に書かれた本願寺系の墨書六字名号は、知名度の高さからほとんどが蓮如筆と伝えられている。ところが、実如も同様に名号を書いており、さらに次の第十代証如も名号を書いていた。この三人の筆跡が似ているため区別が困難であるとされていた<sup>(5)</sup>。

そのような状況の中、一九九八年の蓮如五百回忌に際して、各地の調査によって収集された写真を集めて形態分類する試みが同朋大学仏教文化研究所で行われた。ここでいくつかのパターンに分類して筆者を特定することが提示され、これが現段階での蓮如・実如・証如筆の六字名号などを見分ける指標とされている<sup>(6)</sup>。

### 三、正寿寺所蔵の草書六字名号

正寿寺の草書六字名号は、茶褐色の料紙に「南無阿弥陀仏」の六文字を草書体で墨書されたものである。

この六字名号に使用されている紙は、繊維の細かい画仙紙風のものである。江戸時代に入ると本願寺系で使用される名号紙は楮を原料としたもので、紙漉き時の糞の子の跡が見られるようになる。ところが、蓮如など室町後期の本願寺歴代宗主が名号を書く時に使用した紙には糞の子の跡が認められない。以前、蓮如筆の六字名号の料紙を化学分析したところ、原料に竹が使用された竹紙であるとされており<sup>(7)</sup>、正寿寺の六字名号の料紙も室町時代後期に本願寺で使用されている名号紙と共通する。

また筆跡の特徴としては、蓮如は一日に二〇〇幅、三〇〇幅とたくさん名号を書いたことから、草書体で一気に書き上げるように書いており、その時墨継ぎもせず書くか、「南無」と「阿弥陀仏」の間で一度墨継ぎをする程度である。

正寿寺の六字名号は、経年劣化が見られるなか、スピード感のある書きぶりで、「阿」の傍の上部を右上に力強く引き上げるように書くとともに、その下部を右上がりの「つ」字型とする点は蓮如筆の特徴と言える。

なお、証如の筆跡は、スピード感に欠け丁寧に書く特徴を示す。また実如の署名や書状から認められる筆遣いは、筆の穂先と腹を使いながら書くため筆線に抑揚のある書き方となる特徴を示す。これに対して蓮如は、筆線の太さが比較的一定とする特徴をもっており、このことから正寿寺の六字名号は蓮如筆と認めて問題はない。

正寿寺がこの蓮如筆六字名号を所蔵している経緯については、明治十年（一八七七）に正寿寺住職の棘慧力が作成した正寿寺の「明細帳」<sup>(8)</sup>によると、「往昔真言宗延寿寺アリ、別当観空本山第八世蓮如宗主ニ帰依シ弟子トナリ六字名号ヲ授ル、之ヲ本尊トシ改宗看坊ス」と記されており、真言宗延寿寺の観空が蓮如に帰依して六字名号を授与されて浄土真宗の道場を開いたとされている。その後、寛永十年（一六三三）三月に現在地に移転して、同十九年十二月十七日に空昭が木仏本尊を受けるとともに、正寿寺と改称したとされている。ただ、ここでは簡単な記述となっており、正寿寺の詳細な変遷は定かではない。



## おわりに

正寿寺に所蔵されている六字名号は蓮如の筆と認めることができることから、室町時代に浄土真宗との関係ができたことを物語っている。そしてその後深江において念仏の信仰が守り継がれていくこととなったのである。

## 註

- (1) 浄土真宗本願寺派総合研究所編『浄土真宗辞典』（二〇一三年、本願寺出版社刊）。
- (2) 「蓮如上人一語記」（『大系真宗史料〈文書記録編〉7 蓮如法語』二〇一二年、法藏館刊）。
- (3) 「第八祖御物語空善聞書」（『大系真宗史料〈文書記録編〉7 蓮如法語』二〇一二年、法藏館刊）。
- (4) 『大系真宗史料〈文書記録編〉13 儀式・故実』所収（二〇一七年、法藏館刊）。
- (5) 『真宗重宝聚英第一巻 名号本尊』（一九八七年、同朋舎刊）では、蓮如・実如・証如の筆による六字名号が掲載されているが、区別が困難であるとされている。
- (6) 『同朋大学仏教文化研究所研究叢書1 蓮如名号の研究』（一九九八年、法藏館刊）。
- (7) 本願寺史料研究所編『図録 蓮如上人余芳』（一九九八年、本願寺出版社刊）に、室町時代後期の本願寺系六字名号に使用されている料紙の化学分析の結果が報告されている。
- (8) 本願寺史料研究所保管。

（本願寺史料研究所上級研究員）

## 江戸時代の正寿寺（3）

# 本山から授かった

## 歴代門主の真影

史料館長 大 国 正 美

## はじめに

「本庄村史編纂 寺院の分二十三枚」という表紙のついた手書き原稿がある。これは昭和十七年から本庄村史の編纂を手掛けた郷土史家松田直市が残したもので、元本庄村職員だった岡田博達氏から昭和五十五年七月二十八日に寄贈された史料である。「本庄村誌」の原稿の一部として書いたものと推察される。この中に正寿寺が、西本願寺から門主や高僧の真影を繰り返し入手した記録がある。正寿寺が願主となり、檀家が寄進した記録も含まれる。真影は戦災ですべて失われており、江戸時代の本山と正寿寺、ならびに檀家とのつながりの歴史を明らかにする貴重なデータともいえる。

## 本庄村誌編纂の嘱託松田直市の遺稿

この記録を残した松田直市は、明治十八年（一八八五）に旧中野村の名望家松田安右衛門家の分家松田直左衛門家に生まれた。御影師範学校を修了、西宮第一小学校、精道小学校（芦屋市）、武庫尋常高等小学校で教壇に立った<sup>1)</sup>。四七歳で退職して昭和七年から御影町誌・本山村誌・魚崎町誌・武庫村誌の編

纂に関わった。昭和十七年に本庄村嘱託となり、村誌編纂に着手したが昭和十九年死去した。

松田直市は精力的に古文書を筆写、八冊の「本庄村誌資料」を残した(当館蔵、うち六巻は欠落)。その史料の中に今回取り上げる「本庄村史編纂 寺院の分二十三枚」は含まれていないが、癖のある松田直市の筆跡に間違いはない。寄贈した岡田博達氏は松田直市の三男で本庄村職員になっており<sup>(2)</sup>、何らかの事情で父の遺稿が手元に残ったのだろう。

さてこの原稿は、「由緒」「梵鐘鑄造」「堂宇」「明治時代の本山」に続いて当時所蔵の宝物一覧を記載している。

### 正寿寺開基に関する松田直市の解釈

正寿寺の開基については、中世の真言宗の薬王寺から、文明十三年(一四八一)蓮如に帰依して浄土真宗に改宗、延寿寺となったとされている。寛永十年(一六三三)に現在地に移り、寛永十九年に本山から寺号を受けて正寿寺となった。その時の住職は空照(正寿寺の記録では空昭)と名乗り、開基となったというのが通説になっている<sup>(3)</sup>。

ところが松田直市が筆写した元禄五年(一六九二)の「杜寺吟味帳」では、慶長年間に本山より木仏寺号を受けたこと、時の住職は了順で、了喜―正円と続き、空照は四代目看坊と届けている<sup>(4)</sup>。この食い違いについて、注(4)の前稿では空照は自らは四代目と名乗ったが、後世に開基としたと推測した。

松田直市は、空照自身が四代目と名乗っていたことを踏まえ、たとえば、空照が「本山より木仏寺号を許可せられ永井山正寿寺と改めた。因て当寺に於ては空昭を以て開基と定めた」と、

筆者の前稿と同様の解釈をしている。やはり空照自身は四代目と名乗っていたのに、後世に空照を開基に持ち上げたのだろう。正寿寺の住職の記録でも「伝灯行化五十三年」と書いていて、半世紀もの間住職をしていたとしている。

### 宝物の概要

「本庄村史編纂 寺院の分二十三枚」に書かれた宝物一覧の最初の部分二点を引用する。

#### 法宝物

釈 良如御華押<sup>(5)</sup>

親鸞聖人真影 寛永十九載壬午十二月十七日

常楽寺門徒撰津国菟原郡本庄深江村

惣道場正寿寺

釈 本如御花押

蓮如上人絵像 文化元甲子年三月六日

常楽寺門徒撰津国菟原郡深江村

正寿寺物 願主釈理円

この宝物一覧表をどう読み解いたらいいか。登場する人物を整理してみたい。一行目の良如は寛永七年(一六三〇)、西本願寺一三世門主となり、寛文二年(一六六二)に示寂した。すなわち寛永十九年十二月十七日親鸞の御真影が正寿寺に授与され、その当時の門主の良如の花押が押してあったという意味と解釈できる。続く蓮如の絵像は文化元年(一八〇四)三月六日に授与されたもので、本如の花押が押してあったという意味ととれ

表 正寿寺に西本願寺より授与された真影等

授与年月日	西暦	表 題	授与者	願主
寛永 19 年 12 月 17 日	1642	宗祖親鸞聖人真影	13 代良如花押	正寿寺
正保 4 年 2 月 25 日	1647	12 代准如上人真影	13 代良如花押	正寿寺
貞享元年 11 月 29 日	1684	13 代良如上人真影	14 代寂如花押	正寿寺
享保 12 年 12 月	1727	14 代寂如上人真影	15 代住如花押	正寿寺
明和 4 年 3 月 12 日	1767	16 代湛如上人真影	17 代法如花押	7 代恵音
文化元年 3 月 6 日	1804	8 代蓮如上人絵像	19 代本如花押	8 代理円
文化 6 年 2 月 29 日	1809	大谷本願寺親鸞聖人縁起	19 代本如花押	8 代理円
文化 8 年 11 月 18 日	1811	18 代文如上人真影	19 代本如花押	8 代理円
文政 11 年 5 月 14 日	1828	19 代本如上人真影	20 代広如花押	9 代円乗

る。本如は寛政十一年（一七九九）、門主となり文政九年（一八二七）に示寂しており、これも年代があう。

このほかに授与された絵像を年代順に整理し、願主を付記したのが、表である。なお享保一二年の寂如の真影は玄了ら四人、文化八年の文如の真影は道専ら十人の檀家の寄進によるものである。

まず指摘できるのは親鸞や蓮如など正寿寺にとって特別な存在である例を除けば、基本的には先代の門主の真影に次の門主の花押を押してもらい受けるというのを基本にしている。ただ一六代湛如と一八代文如の花押の押した真影は欠けている。

第二に、六代目までは願主は正寿寺とだけあるが、七代目以降、住職の個人名になっている。前号で報告したように七代目の恵音が天明六年（一七八六）本堂を建立し、中興開基とされる。それまでの村の共有の寺から、自庵としたため住職が願主となって申請し、授与されるようになったのだろう。

第三に、次の八代目理円の時代に宗祖親鸞の絵伝と、浄土真宗に改宗した際の蓮如の真影を受け、さらに先代門主の真影を受けている。本山と檀家との関係を強め、理円は西本願寺の院家・内陣・余間に次ぐ格式である三之間に就任した。この三之間は、西本願寺の御堂の余間の外にあり、仏事に仕出した際、三之間に着座して勤行を行うことをさした。

#### おわりに

七代恵音は住職にあること二四年にわたり、寛政八年（一七九六）に理円に住職を譲り、寛政九年に遷化した。逆算すると安永二年（一七七三）ごろから住職を務めた。八代理円はいつまで住職だったのかは未詳だが、弘化三年（一八四六）八月に遷化している。恵音が本堂を建て、次の理円が親鸞や蓮如の真影を本山から授かり、また本山での地位向上も果たしたのである。一八世紀後半から一九世紀前半に正寿寺は大きく繁栄し、本山と関係を強めた時期にあたるのが、失われた宝物の記録からも明らかにできる。

（1）大国・樋口元巳「本庄村誌囑託 松田直市」『生活文化史』四号、二〇一六年。

（2）大国「解村時の本庄村職員」『生活文化史』三七号、二〇〇九年。

（3）森口健一「正寿寺と大日神社」『生活文化史』五〇号、二〇二二年。

（4）大国「江戸時代の正寿寺（1）新史料「社寺吟味帳」から」『生活文化史』五一号、二〇二三年。

## 新着資料紹介

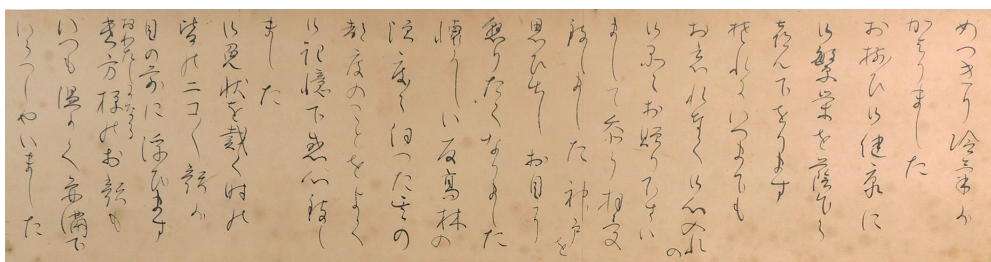
## 谷崎潤一郎夫人・松子からの書簡

史料館副館長 道 谷 卓

史料館は、二〇二四年（令和六）十二月に、文豪・谷崎潤一郎夫人の松子を書いた書簡の寄贈を受けた。谷崎松子を書いたこの書簡は、谷崎の代表作『細雪』にも登場する神戸の寿司職人・尾崎又二郎に宛てたものである。

額に表装されたこの書簡は、住吉川沿いの旧久原房之助邸跡に建つオーキッドコートにある「又平」という寿司店の座敷に飾られていた。この又平の初代当主が書簡を受け取った尾崎又二郎で、その孫の尾崎正佳・伸之兄弟から、この度、店を閉めることになったので、この書簡を多くの人に見てもらいたいと、史料館に寄贈していただいた（正佳氏が、私の中学校の同級生という縁で寄贈された）。

「又平」は、又二郎の時代には「与兵」と言う名前で生田神社の近くに店を構えていた。グルメだった谷崎は、住吉川沿いの「倚松庵」に住んでいた、一九三六年（昭和十一）から一九四三年ごろの間、この「与兵」にもよく通った。そこで、谷崎は、『細雪』の中巻・三〇章に「与兵」の一節を設け、頑固で気骨ある寿司職人としてこの店の主人を描いている。この『細雪』に出てくる寿司職人が、書簡の名宛人である尾崎又二郎そのものである。



## 松子夫人の書簡全文

めつきり冷気か  
かはりました  
お揃ひ御健康に  
御繁栄を蔭乍ら  
喜んでをります  
それにいつまでも  
お忘れなく御心入れの  
御品々お贈り下さい  
まして忝う拝受  
致しました、神戸を  
思ひ出し、お目に  
懸りたくなりました  
懐かしい反高林の  
頃、度々伺つた其の  
都度のことをよく  
御記憶で感心致し  
ました  
御免状を戴く時の  
皆のニコ／＼顔が  
目の前に浮びます  
おわたしになる  
貴方様のお顔も  
いつも温かく円満で  
いらつしやいました

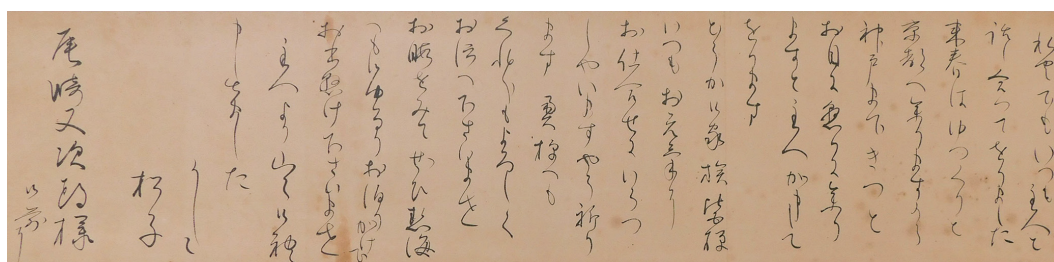


この書簡はなぜ松子夫人から又二郎のもとに届いたのであるうか。戦後、谷崎夫妻は、神戸を離れ、静岡県の熱海に住んでいた。谷崎は、又二郎の握る寿司が忘れられなかったため、わざわざ、熱海まで又二郎を呼んで寿司を握ってもらっているのだ。一九六三年（昭和三十八）の夏、又二郎は息子の幸雄（私の同級生の父）を従え、寿司桶を担いで夜行列車に乗って熱海にある谷崎邸に駆け付けて、『細雪』に描写のある往年の寿司を谷崎のために握った。谷崎は、このことをとても喜んだ。

この手紙には、松子夫人はいつまでも忘れず贈り物を贈ってもらったことへのお礼をまず述べている。贈り物をもらい、倚松庵のある住吉の地名・反高林に住んでいた頃を思い出して懐かしいことや、来春には京都に行くので神戸まで足を延ばして会いに行きたいというようなことを書いている。「神戸を思ひ出し、お目に懸りたくまりました」と初めに書いているので、久しく出会っていない時期である。それでも贈り物を続けている。谷崎と又二郎の交流の深さが偲ばれる。

また、この額には、送られてきた封筒も添えられており、そこには、谷崎夫妻が住む「熱海市伊豆山」の住所、十一月二十四日という日付、「谷崎潤一郎 内」という文字が書かれている（表紙写真）。ちなみに、谷崎は「伊豆山」に一九五四年（昭和二十九）から住んでいる。

これまで店を訪れた人にしか知られていなかった谷崎潤一郎関連の資料を、この度、史料館で公開することになったので、多くの来館者にその実物を見てもらえることができれば幸いである。



私共でもいつも主人と話し合つてをりました  
来春はゆつくりと  
京都へ参りますから  
神戸まできつと  
お目に懸りに参り  
ますと主人が申して  
をります  
どうか御家族皆様  
いつもお元気に  
お仕合せにいらつ  
しやいますやう祈り  
ます、奥様へも  
くれぐれもよろしく  
お伝へ下さいませ  
お暇をみてぜひ熱海  
へもおゆるりお泊りかけ  
でお懸け下さいませ  
主人より山々お礼  
申し出ました

尾崎又次郎様

御前に

かしこ  
松子

（翻刻・大国正美）

# 深江文化村居住の

## ワルターについて

研究員 有 吉 康 徳

### はじめに

深江文化村に、ワルターという人物が居住していたことは知られており、『本庄村史』の中でも家屋番号Bの借主はワルターであったと記載されている(図)。また一九四〇年十一月三日の「大阪毎日新聞」の引用文では「ベルギー生れのオルサーら七軒が居残っているだけになった」という記載があり、深江文化村から多くの外国人が去った後にもワルター一家が残っていたことがわかつている。一方でワルターの生没年や来日時期、どういった仕事をしていた人物であるかについてはこれまで把握できていなかった。この度伊丹市在住の渡邊正之氏の調査や史料館の補足調査により、ワルターやその家族に関する情報が明らかになったことからその一部を紹介する。

### ワルターの半生

ワルターについては、略歴を記したノートが見つかり、本名はJean Voldemar Waltherといい、一八八八年にロシアのサンクトペテルブルグで生まれたと分かった。ベルギー国籍の人物である。一九一五年九月十五日にロシアでポーラ (Paula Sophie Walter) と結婚した(以上、略歴ノート、写真1)。別

資料のUN

TRG (申

請) に娘の

レオノール

は一九一六

年九月九日

に横浜で生

まれたと記

載されてお

り、一九一

五年から一

九一六年頃

に来日した

ことが分

かった。ワ

ルター宛の

はがきから

横浜山手居

留地五七番

地に住んで

いたことも確認できた。

『The Japan directory』(国会図書館蔵)

から一九一七年〜一九一八年はThe SWISS Japanese Trading

Co. (東洋輸出入商会) で働いていたことも判明した。

妻ポーラの旅行記録「DampferD. "Emill Kirdorf's te reise"」に

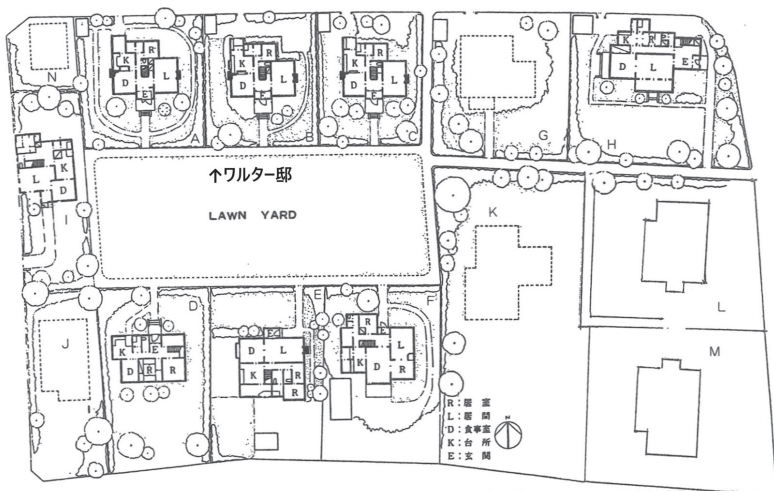


図 深江文化村の配置図

山形政昭「芦屋『文化村』の記」

大阪芸術大学紀要『芸術』6 (1983) 所収の図に加筆

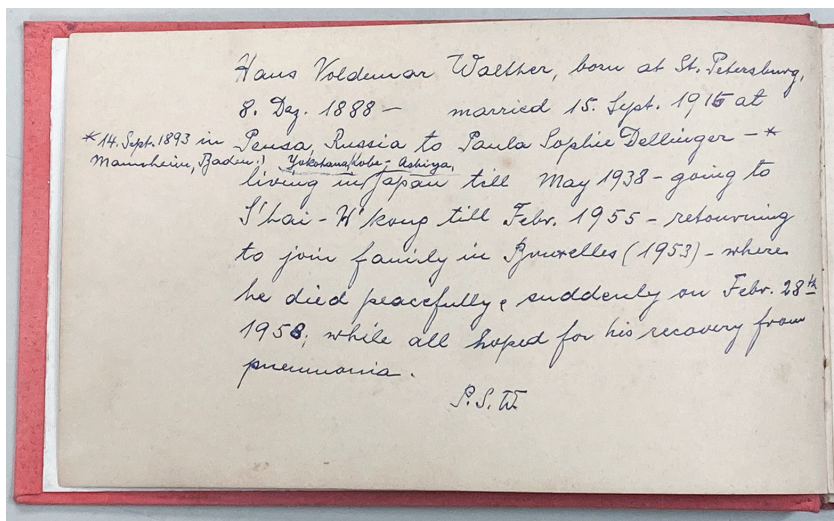


写真1 ワルターの略歴を記したノート（渡邊正之氏提供）



写真2 ワルター夫人（同）

ワルターの妻ポーラは一八九三年にドイツのマンハイムで生まれた（写真2）。日本に来てからは横浜から神戸に移り、山本通や深江文化村に居住した。一九三二年ころから KOBE WOMEN'S CLUB に所属、交流事業に加わった。長期間の旅行もしていた。ビザの取得記録から判明する居住地は以下の通りである。

一九一六年から二一年まで横浜居住→二三年ま

社マンで、一九二六年のベルギー領事館あての書類では、ワルターは三宮町一丁目の村田梅谷商店に勤務していた。しかし一九三五年刊の日本と満州国に

は一九二三年には山本通二丁目に居住。一九三五年にコロイド科学者のワイルマンからワルターに送られた手紙の宛先は北野町四丁目一二五となっている。北野町四丁目一二五は北野町のトーアホテルの住所地で、ホテルに滞在していたか、郵便物の受取代行をしていたのだろうか。神戸に移った時は引き続き商

居住する外国人を調査した『Japn-Manchoukuo year book』（国会図書館蔵）によれば、一九三〇年に Insurance Agency of Life, accident, fire, motorcars & Fidelity という保険代理店を起業、住所は深江文化村とある。同書には一九三九年発行分まで毎年、同じ内容で掲載されている。

写真1のノートによれば一九三八年五月まで日本にいたが、上海と香港に移り、一九五三年に家族と合流したことが記載されている。妻ポーラがアメリカのワシントンに出国したビザでは、本人の住所が深江文化村、夫の住所は香港と記載されている。ワルター自身は、戦前に拠点を上海や香港に移していたが、家族は引き続き深江文化村に居住していたのである。

一九五三年の九月から十一月にかけて神戸港から家財道具を発送したことを示す記録が複数あり、ワルターの家族はこの時期にベルギーに帰国したようである。

そしてワルター本人も一九五五年に香港からベルギーに帰国し、一九五八年にブリュッセルで亡くなった（写真1）。

#### ワルターの家族



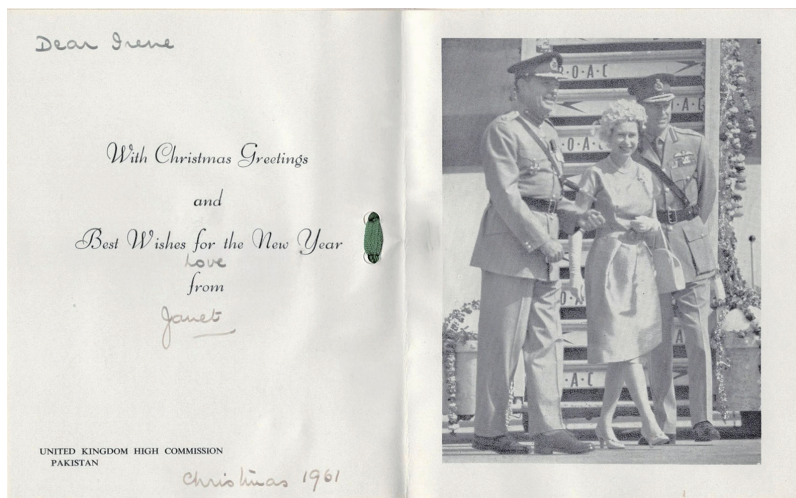


写真3 イレーヌに贈られたクリスマスカード（同）1961年

で娘二人とドイツに滞在→一九三七年まで神戸や深江文化村に居住→一九三八年までドイツ、ベルギーを旅行→一九五二年まで深江文化村居住→一九五二年ニューヨーク→一九五三年ベルギー帰国。

長女のレオノール (Leonore Edith Walther) は、前述したように、UNTRG (申請) によれば一九一六年に横浜で生まれ、

一九三六年に三井系のドイツ物産会社に勤務した。一九三八年頃にバイエル薬品合名会社に移り、一九四七年頃まで在籍した。一九五〇年にアメリカ赤十字社で看護助手の資格を取得したことを、香港の父ワルターに報告した書類も見つかった。

次女マリアンヌ (Marianne Paula Walther)

はベルギー移住後の選挙関係資料から一九一八年に横浜で生まれたと判明した。一九四八年に妹イレーヌからマリアンヌ宛の手紙から Dodwell & Co 神戸に勤務しており、ワルター一家が日本を離れるまで深江文化村に残っていたことが、三女との手紙のやりとりからうかがえる。

三女のイレーヌ (Irene Hildegard Walther) は、生年についてはよくわかっていない。神戸聖マリア女学校 (神戸海星女子学院の前身) とカネディアンアカデミーを卒業し、一九四六年に GHQ の速記秘書・通訳として働いていた。イレーヌからの手紙から一九五〇年に日本を離れ、香港のベルギー領事館やパキスタンのベルギー大使館に勤務していた。一九六一年にはエリザベス女王がパキスタンを訪問、イレーヌも関わったと思われる、この年イギリス大使館からイレーヌにクリスマスカードが届いている (写真3)。

#### おわりに

深江文化村に居住していた音楽家に比べて、その他の外国籍の住人の経歴についてはあまり知られていなかったが、この度の渡邊正之氏の調査により、その一端を知ることができた。また、戦前から戦後にかけて引き続き深江文化村に居住していた外国籍の住人がいたことも明らかになった。なお、本稿では触れなかったが、古澤邸を設計し、自身も深江文化村に居住したラディンスキーからワルター一家に送られたと思われる手紙も発見されている。この手紙については今後情報を整理して報告することとしたい。



## 深江物語 (14)

## 本庄小学校の話(2) 校歌

深江塾 森 口 健 一

今回は本庄小学校の校歌の「歌詞」と「作曲者」の話である。  
歌詞について

現在の校歌は、昭和二十二年（一九四七）十一月の学芸会で発表された。『本庄小国民学校沿革史』は「十一月二十三日（新嘗祭日）新装成った復旧の講堂で全一日に大プログラムの学芸会を民主的に実施 急作の校歌に始まり校歌に終わる（以上原文のママ）」と簡単に伝えている。

歌詞については、『沿革史』は何も記載していない。歌詞のみならず作詞・作曲者の名も記載がない。まず歌詞について校歌創作時から今日までの変遷について書く。

昭和三十五年度の卒業生に配布された校舎を背景にした校歌の写真がある（写真1）。校歌を書いた公式のものとしては一番古いものだろう。その写真にある歌詞の表記は次の通りである。  
注・（ ）内は筆者記入。

(一)  
茅渚の浦曲に 五輪のそびゆる  
親和の学舎 さやかに陽をあび  
心もゆたかに 生氣にみちみち  
恵の潮に 仲よくむつばん



写真1 本庄小学校校歌

いざ強く 共に行かん

大志もて われら学童 わが本庄

(二)

武庫のやまやま 眺めはひらけて

浜のうら風 のどかに吹く里

歴史を語るか 青木の船うた

深江の老松<sup>(おいら)</sup> 枝ぶりなつかし

いざぎよく古きひびき

身にうけて われら学童 わが本庄

(三)

東西文化の <sup>(豪華)</sup> どうかに咲きそう

平和の郷土に 明るき学園

健康いやまし 心をつちかい<sup>(培い)</sup>

世界のともども 手を取り仲よく

いざたたん 行くてはるけし

勇ましく われら学童 わが本庄

学校創立一〇〇周年に際して本庄小学校が平成十二年(二〇〇〇)一月三十日発行した『本庄のうつりかわり』という冊子に記載されている校歌の表記は、一番の出だしは「ちぬの浦和に 五輪のそびゆる」となっている。「ちぬの…」は大阪湾の別名でもあるが漢字が難しいのでひらがなに変えたのかもしれない。ただ、「うらわ」が「浦和」となっているのは感心できない。「ちぬの うらわ」の「うらわ」は漢字では「浦曲」で、雅語で

神戸市立 本庄小学校 校歌

作詞 藤田幸伸  
作曲 信時 潔

1.ち 一ぬの うらわに ご りんの そび ゆる  
2.む 一この やまやま な がめは ひら けて  
3.と うざい ぶんかの ご うかに さき そう

し んわ の ま な びや さ やか に ひを あび これ  
は ま の うら か ぜ の どか に ふく さと  
へ いわ の きょう どに あ かる き がく えん け

こ ろも ゆ た かに セ いき に みち みち  
き しを か た るか お おぎの ふな うた  
ん こう い や まし こ ころ を つち かい

め ぐみの うし おに な かよくむつ ば ん  
ふ かえの おい まつ え だぶりなつ か し  
せ かいの と も ど も てをとりな か よ く

い ざつよく と もにゆかーん た いしもて  
い ざきよく ふ るきひーき みにうけて } わ れらがくど  
い ざたたん ゆ くてはるけし いさましく }

わ が ほ ん じょう じょう

本庄小学校校歌 (本庄小学校提供)

入江や海岸の意味である。「浦和」は埼玉県の県庁所在地の都市名である。本来の歌詞の意味は、「大阪湾の岸辺に五輪の塔が聳え立つ我が学び舎」なのである。

三番の二節目が、「平和の郷土に 明るき楽園」となっている。それまでの歌詞は「楽園」ではなく「学園」だった。しかし「学園」が「楽園」となれば、学校とは何かという疑問すらおきかねない。

この表記についての変遷を元学校長の平山先生の協力を得て



写真2 藤田幸伸校長  
1943年3月  
本庄国民学校  
卒業アルバムより

判明した結果を記しておく。  
昭和三十六年までは、「うらわ」と「学園」の表記。それから三十年間は卒業アルバムに校歌の記載はない。平成五年（一九九三）から平成十八年（二〇〇六）の卒業アルバムには「浦和」と「楽園」の表記になっている。平成二十三年のアルバムには「楽園」は「学園」に変更されたが、「うらわ」は依然として「浦和」のままである。

作詞作曲者について  
『沿革史』には、校歌が発表された様子を簡潔に記載しているが、既述の通り作詞者や作曲者については記載がない。作詞者と作曲者については公式の記録は現在不明である。証拠や史料としては不十分を承知で筆者の手元にある資料をもとに作詞作曲者について述べてみたい。

筆者が校歌の作詞作曲者が誰であるかを記した文書を見たのは平成二十八年（二〇一六）二月八日、本庄小学校の校長室だった。当時の上橋秀司校長の話によれば「平成二十七年八月ころに校歌の由来について外部の方から問い合わせがあった」「その時には公式記録がないので、詳細は不明と回答した」という話



写真3 潮田先生の諏訪山小学校へ転任の記念撮影（1960年3月17日）元本庄村役場だった本庄公民館前で。前列右から北城喜三郎・中田常太郎・潮田・永井庄左衛門元村長・永田広治・平井富士夫、後列右から柴田次郎・丹羽新一郎・前中芳太郎・太田垣正雄元助役・寺田好雄。村長・助役以外は元村会議員。

だった。その時校長から「由来は不明だがこんな文書がある」と「校歌制定の経過」という手書きの文書を頂いた。そこには作詞者が「藤田幸伸校長が作詞された」と記されている。

「校歌制定の経過」という文書は手書きで、文の末尾には「1990・1・26」と書いてある。その書面全文を原文のまま引用する。









露に間に合うように、学校（校長）が作詞し曲は兵庫県民歌を借用した。『沿革史』に「急作の校歌」との記載はこのような事情があつた。著作権の問題はおそらく学校側も当初から認識していたのであろう。それゆえに「急作」とし、永らく平成二年（一九一〇）筆者の母校で借用である事、年近くになつた田義美先生や當伝統ある学校の

○)まで作者(作曲者)不詳としてきたのである。ある本庄小学校校歌が、兵庫県民歌の曲からの疑いのないことを知った。校歌ができてから八十としている。校歌創作時の経緯を知る教師の潮国忠夫先生などすでに鬼籍に入られている。校歌の由来(作曲者)が判明しているのに、い

つまでも不明・不詳というのは好ましくないと思い、このたびの記述に至った。

謝辞 本稿の執筆にあたっては、神戸市教育委員会、本庄小学校に資料の提供などで協力を得た。末筆ながら厚くお礼申し上げます。また兵庫県民歌の楽譜はWEBサイト「『兵庫県民歌』の記録と記憶」(<https://hyogopreisong.wixsite.com/jp28>)に掲げられている。

# 兵庫縣民歌決る

歌おう 郷土の誇り

四月に盛大な發表會

郷のほこ  
りをつらに  
しめて、  
祖門再建へ  
の三百萬縣  
民の奮氣を  
鼓舞するた  
め新舊法公  
田記念事業

長岡神社新聞編輯の手で  
第三次審査を行つて優秀作三十  
四題選んだところ、全体委員会で  
第次審査をし結果、一等一  
福(賞金二万円)佳作十福(賞  
金百円)を決定。十八日午  
の三時發表など。

一等 川辺郡小枝村川原字大

繁七野口猛(若馬郡)  
『佳作』武部龍彰影射史洪忠  
六九勝良。(会評員)△太  
阪市東区市邊町七丁上座  
阪井節多志△加賀郡市街  
藤村新正一二七二號原田  
憲△西宮市高木西久保五  
二丁目橋下 彌藏△東京府  
並区天竺 一五六〇出(李  
(会社記)△頭取郷生助訪記

兵庫縣民歌

一  
祝辭民歌は　わき立つるやうに　日本のあけぼのの  
北は北海　岸邊の眠は　あめたりこそ  
道・簡は麗　大公開の　布新療法  
同書照まで  
全四巻地か　ゆては明かるし、民平の樂園  
十編につた　りされら　共絶をぢ  
田知およむ　礎の力をわれら　わが兵衛

二

あかき山頂原	さびの山々
時の流れて	夢はながた
のびのびと	湖のまじり
さきさきと	巨木と空と
にらむれど	共におも
御所の花をわれど	わが居座

三

歴史はながけし	文化の水
さきさき流れに	ながやうの名
ゆるやかに流流	ためよめ流流

使命にあたりし 世紀のこの朝  
にまわれし 共 濟しむ  
民族のほびりをわれら わが民  
四  
ごぞれしこの民 祖國の再建  
希望の光は 天地に満ちたり  
雷河にひるまふ 心をあはせて  
進めばひとすじ 世界の平和へ  
にまわれ 共に歩む  
永濟の理想をわれら わが民

屈せざるものゝ敵事をつま  
げにかなの明治、大正年代に  
わが兵團燃が果た偉大な榮  
耀をおこし、もう二度とや  
らうとばかりませんか、益し  
に私の歌が立派な曲に作られ  
てらんかやでも、この大戦争  
事待て立ってゐるものは、の  
上の喜ぶものまふ

教壇生活十八年

一等當選の野口猛氏



「等当派の野口蘆氏(四二)は  
小學校卒業後、大阪府で檢  
定試験をうけて、本科正教員の角  
許狀を得、川辺郡喜尾小學校代

野口氏は左の如く当選の喜びを露る（写真は野口氏）

町(六)岩宮(膳所)(湯島)  
 (八)尼崎(岸部)(大田)(  
 阪市)(多摩(助産婦)(福岡  
 縣)郡(高田)(花田)(鹿  
 嶋)(八坂(郡)村(類阿二  
 八八)本好美(國民學校教員) 僅す

一等選作は作曲家岡田民の  
 手で三月七作曲の「春を贈  
 民歌として四月盛大演奏を

一筆當選の野口猛氏

教壇生活十八年

再數卷を提出し、同郡宅塚、有馬郡三田國民學校の訓導となり、現在有馬郡三田國民學校校長に當り、十八年間教職生活をつづけている。少年時代から詩歌、繪画に興味を持ち、雜誌その他に投稿してしばしば賞を得、かつ本社が募集した学生市歌に



図 1 昭和 10 年代前半の神楽町界隈の回想図  
(昭和 13 年本庄小学校卒業生による)

比較すると随分長距離通学である。その時、私はこの小学校の担当、石田先生の紹介で途中早く御影師範附属小学校へ転校したので、その後の小学校時代の友好には記憶にも無い程だが、神戸高商の時代となり初めて親交を得ることとなった。彼は昭和四年卒業し、日新火災への就職と共に会社関係の住宅に居を移した(あとは実兄―三和銀行勤務の大先輩―が住んだ)。その後彼は社長を長く勤め、部下との交流を深めるために色々と心を配り、麻雀を以てその一方策としていたことも有名であった。彼の本社が大手町の交叉点にあり、或時その付近で偶然彼に出会い、一緒にお茶でも飲もうかと云ってくれたので、珍しい事と感じながら三菱ビルの地下に付合った。妙にしんみりと話し出した。

「五、六才の頃、付き添ってくれているおばさんに

## 深江の心象風景(5)

# 深江の水と文化村の景観

筆者 岡田 茂 義

## 二十二、当時の神楽町

昔に振り返り記憶を辿って僅かながらも神楽町(今の深江南町一丁目)につき記載して行きたい。先づ私の神楽町の住いの近く

傍示川

から書き始めると、湯川寛吉氏から始まる。氏は住友本社の総理事として住友の事業を全般に亘り担当し、遂行した。神戸高商の大先輩である。岡橋愛子さんは小池姓を通じてのその孫娘である。お邸の前の通路を隔てて、その所有地である広い地域に、梅、桃が沢山植え込んであり、その各々の季節には、夫々の綺麗な満開を見ることが出来た。

次は楢西邸となる。少し海岸の方へ進んだ所にあった。私の学友楢西誠治君が住んだ所であり、小学校時代、彼はここから本庄小学校に通った。神楽町は深江の東のはずれにあり、長い道程の通学である。私は本町の自宅から通ったので





写真 1 小寺源吾邸の居間



写真 2 昭和 4 年ごろの深江から芦屋にかけての海岸  
防波堤が切れ砂浜になり海水浴客もいる  
(昭和 5 年『神戸高等商船学校機関科座学修了記念誌』から)

最後に嘉門邸、海岸より少し離れて東西に伸びる静かな通りがあり、両側に立派な別荘が見られた。何れも大阪の実業家のものではあった。中でも道の南側に広い敷地の立派な別荘があり、嘉門さんと記憶する。どのような方であったのか知らなかったが、ここに書き落とすことの出来な

違の超一流の存在であった。息子の  
大次郎君は御影師範附属小学校の同級生だった。大次郎君は三井銀行に就職したが、弟は長くユニチカの社長を勤めた。住吉の観音林に邸宅があり、遊びに行くとお母様の心を籠めたもてなしを受けた。深江の臨海に別荘を造られたのは、海水浴が主な目的であった。芦屋の浜は小石が多く白砂の海岸とは言い難かった。

手を引かれながら君の住まいの松林に沿っている横の道を通って家に帰り着いたものだ。二人だけの淋しい暮しだった」と回顧してしんみりと語った。彼のその思いが私の胸に深く浸み入った。楫西家は大阪西区新町の大手の間屋（何の商売か失念した）。このおばさんはお妾さん<sup>めかけ</sup>だった。この事情を当時私は既に薄々知っていた。この時より暫くして彼は癌で入院したので、これが彼との最後の会合となった。彼はこの入院中も毎日必ず業務

報告を受け続けていた由、聞き及んでいた。  
昔を偲べば、彼は非常に若々しく元気で頼もしい男だった。我々の同期の集合があるといつも、「お前達の弔詞は俺が読んでやる」と自信たっぷり云っていたのだがこんなに早く亡くなるとは予想もしなかった。  
次は小寺邸、小寺源吾氏は大日本紡績の社長だった人。当時の大日本紡と云えば東洋紡と並んで他の紡績会社とは格段の相



い程の立派な別荘邸宅であった。

阪急電車神戸線の開通は昭和の初期であり、それ以後阪神間の山手に急激な開発が進み、別荘地として又住宅地として大発展したが、それ迄は阪神電車沿線の芦屋の平田町、公光町、深江の神楽町だけがその対象となっていた。因に阪神電車は明治三十八年（一九〇五年）の開通である。

### 二十三、深江の水

本町にあった本宅には勿論井戸はあってポンプで汲み上げていたが、飲料、台所用には、一段深い層の湧き水を噴き出させ、これを掘り抜き井戸と云ったが通常「掘抜き」と簡略化して呼んだ。噴き出した水を横にある大きな矩形のコンクリートの水槽に引入れて貯水する仕組みになっていた。この湧き水は深い層からのものであるので金気があり、味には関係は無いが触れている物に次第に薄茶色が付く。擦れば直ぐ落ちる。阪神間のこの掘り抜き井戸による水は必ず金気を伴っていた。

この湧き水は六甲山系より芦屋の溪谷に流れ込み、再び地下に潜って細かい砂利層で濾されて湧出してくる。清澄な水で銘

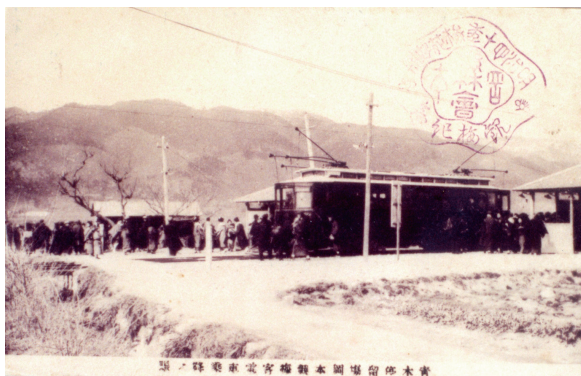


写真3 明治40年ごろの阪神電車青木駅  
(神戸新聞総合出版センター蔵の絵はがき)

酒灘の生一本の素地となる「宮水」の系統であるから硬水であるが、多分の炭酸分を含む鉱水であり、お蔭で天恵の「水の味」を味わっていた。花崗岩で構成されている六甲山より芦屋川に流れ込む水は花崗岩を構成している三種目の石英、長石、雲母が夫々崩壊して出来た砂利の層を通して来たものであり、非常にきつい硬水であった。例えば、洗濯したタオルなどパリパリに乾き上げられ、そのまま顔を拭くことが出来ず必ず一度揉み解いて使っていた。

宮水については深江など灘五郷は臨海の地であり、その海岸からの地下浸水が宮水に溶け込む。この海水は長期に亘って構成された貝殻の積層を漉し通って出て来る。従って、カルシウム分を含有し、これ又、硬水である。上からと下からの強い硬水による井戸水が灘の銘酒の原料となる宮水である。これは京都大学の研究によるものと記憶する。

昭和十四年頃、住居は神楽町にあった。松林に囲まれた所であったが、その西側通路の出口に黒田さんの住居があつて、その井戸へ冬の酒醸造期には馬力によるタンク車が引つき無しに、その井戸水を運んでいた。主として西の方への運搬だった。東方面は直接西宮の宮水を汲んで運んだのだらう。何れにしても、この辺の井戸水は総て酒醸造の原料水となり得る硬水であった。

昭和七年、学校を卒業して愈々就職が始まり、大阪勤めとなった。この時飲む水は淀川水源によるものであり、その不味さには、驚き入った。流石に六甲の水は味があると感銘した。当時水道に依る給水が原則となっていたが武庫川水源であり、上が

原（西宮の山手）に浄水場があった。神戸市は生田川水源であり、布引の滝が水源地であった。そのあと人口増加に伴い、次第に淀川の水を引き入れる淀川水源に頼るようになった。

その後、昭和三十五年頃、勤めの関係で京都住まいが始まった。その頃僧房などを訪れると、実に薫り高いお茶を出していただいた。私が五、六才の頃、祖父がお客さんのある時、私を傍らに呼んで一緒に煎茶一服飲ませてくれた。その味を心得て、その後も玉露茶の質を充分吟味しながら茶を点<sup>た</sup>てるのだが、この僧房の薫り高いお茶には及ばないとつくづく思った。矢張り加茂川の水のせいだろう。

秀吉が茶を点てるため、わざわざ宇治川の水を汲ましたという場所が宇治橋の欄干の出っ張りに「三ツ間」という名で遺されている。

水の性格には我々が常に拘<sup>きく</sup>すべきものがある。「水は万円の器に随う」とか「如水の交わり」とか我々常に心得るべき数々のものを示唆してくれる。殊に年が進んで来ると、如水交など全く魅力的な言葉である。別に話の穂を繋がなくとも、ただ会っておれば楽しいと云う様な交りは最高の交りと思う。友との交際も次第にかくありたいと思う。

ギリシヤ神話ではヴィーナスは海水から生まれる（ボッティチェリ Botticelli の名画で知っただけだが）。ゲーテのファーストには「すべては水より生じたり。すべては水にて長らえん。」とある。誠に、水は生物の母である。

生物が海で発生し、水を含みながら陸へ上がって来たということは生物の含水量の多いことでも明白であり、これが現在の

定説のようだ。人間の生命も、水で成り立っている血液の上に浮かんでいる物質であると云い得るのではなからうか。

然<sup>しか</sup>し、水それ自身は生命を生長せしめるものではない。これは生命の中に存在する独自の自我、自覚に依るものであり、各自の努力を以て果し得るものであるということを承知せねばならない。お互いに頑張ろうではないかと云うことである。

### 後書

昔、深江村は阪神間で遜<sup>そんしよく</sup>色のない村であった。何れの市町村も海辺の地から発展して行つたものだが、特に深江は田作りの出来る地域で、当時は他の地域（殊に芦屋は芦屋川により六甲山の花崗岩の流砂で覆われ、田畑は極めて少なかった）に比して深江は遥かに有利な条件の下で商店街も栄えたが地域には限度がある。次第に山手の地区へ視線が向けられていき、殊に芦屋の伸展は、阪急電車開通と共に目覚ましいものがあつた。

従つて深江も一時衰退の時代があつたが、阪神大震災のあと急激に伸展の状況が現れてきた。神戸の中心復興が思うに任せず、更に山手の開発が一応の限界となり、そのために臨海の埋立てが進展し、今後引続いて活動しようとする力が自然この地に向けられてきた。個人の住居需要は勿論のこと、企業の発展基盤の対象にも欠かせない地区になってきた。

深江の伸展を念願しながら筆を措く。

平成十年二月二十四日

岡田茂義記

◇この連載は単行本となり史料館で無料配布しています。

## 史料館この一年 大 国 正 美

### ◆研究と史料収集

調査研究では二〇二四年度は大きな成果があった。正寿寺に伝来する蓮如筆と伝えられる「南無阿弥陀仏」の六字名号が、専門家から真筆に間違いはないとお墨付きを戴いた。深江文化村についても、職業不詳だった住民のワルターに関する史料が数多くコレクターから紹介いただき、保険代理店を営むベルギー人で戦後まで在住していたと分かった。また史料の収集では、谷崎潤一郎の夫人、松子の書簡が寄贈され展示を始めた。いずれも本誌に成果を掲載した。成果の公開では、本誌で連載中の岡田茂義氏の『深江の心象風景』を次女の福田誠子さんのご支援で単行本として発刊、一年で在庫が底をつき、福田誠子さんに増刷いただいた。

### ◆イベント・取材協力

イベント関係では、地方史研究協議会の初の兵庫大会が十月十九日、二十日甲南大学で開かれ、史料館の紹介展示を行った。また毎年行われている魚屋道を歩く会に先立ち、初心者向きの「魚屋道さんぽ」が行われ、解説に協力した。例年通りではひょうごプレミアム芸術デーに協賛し、田中邦彦画伯の作品を展示、関西文化の日にも協賛した。このほか、山納洋氏の取材に協力、『歩いてよみとく 地域経済』（二〇二五年三月）が出版され、財産区による地域遺産の保全と継承の事例として紹介された。また神戸に平和記念館をつくる会に写真を提供、三月に長田区文化センターで開催された「神戸空襲と神戸港の写真展」で展示された。

関西テレビ、NHKのペロ・シロタ調査協力、朝日放送テレビ「newsおかえり・なんでやねん!？」などのテレビ番組の取材協力、福井県の今立吐酔調査協力、日本女子大の佐々木陸摩氏による深山杲氏の調査にも協力した。

### ◆図書館サービスポイント事業

令和六年度（二〇二四）の史料館での神戸市立図書館の予約図書受取や図書返却サービスは、貸出冊数月平均一六六五冊（前年比一一〇％）、返却冊数は一六七九冊（同一〇八％）、貸出を利用した人数は月平均五六六人（同一〇四％）でいずれも過去最高を更新した。過去最高だった二〇二三年は月平均の貸出数が一五一〇冊、返却冊数が一五四七冊と、初めて一五〇〇冊を突破したが、今年度とともに一六〇〇冊を突破。三月は貸出二一三〇冊、返却二一六九冊と、初めて単月で二〇〇〇冊の台に乗った。毎月の人数・冊数は表の通り。

施設の改善も行った。女子トイレが冬季は寒い、また小学校高学年の女兒も学童保育で利用することから、ウォシュレットを導入した。

2024 年度の図書利用

月	貸出		返却
4	1454	490	1478
5	1433	496	1366
6	1840	637	1870
7	1478	515	1480
8	1536	530	1644
9	1862	659	1799
10	1607	561	1639
11	1718	572	1753
12	1774	570	1612
1	1473	476	1586
2	1676	572	1755
3	2130	724	2169
合計	19981	6802	20151
平均	1665.1	566.8	1679.3

## 史料館日誌抄

史料館副館長 道谷 卓

## 二〇二四年四月～二〇二五年三月

- 4月4日 岡田茂義氏『深江の心象風景』発刊、財産区の要望を受けホームページでも公表。
- 4月6日 季節の展示コーナーを「端午の節句」に展示替え
- 5月11日 関西テレビの取材(大国)
- 6月8日 女子トイレ改良工事、神戸学院大学(見学者一八名)
- 6月21日 兵庫県立大学大学院(見学者一五名)
- 7月22日 季節の展示コーナーを「夏の風物詩」に展示替え
- 7月16日 ひょうごプレミアム芸術デーに協賛し、田中邦彦画伯の作品を展示
- 8月11日 NHKのペロ・シロタ調査協力
- 8月24日 今立吐酔調査協力
- 9月1日 季節の展示コーナーを「中秋の名月」に展示替え
- 9月8日 第1回魚屋道さんぽ
- 9月28日 神戸新聞文化センター歴史ウォーク(見学者三〇名)
- 10月6日 東灘ボランティアガイドの会(見学者一九名)
- 10月18日 第26回魚屋道を歩く会
- 10月19日 20日 地方史研究協議会の初の兵庫大会が甲南大学で開かれ、史料館の紹介の展示
- 11月2日 企画展示 田中邦彦画伯「東神戸 懐かしの風景展2」開始(十二月十六日まで)
- 11月9日 ラジオ大阪パーソナリティの山納洋氏の取材協力、二〇二五年三月に『歩いてよみとく 地域経済』として出版
- 11月16、17日 関西文化の日に協賛
- 12月7日 神戸に平和記念館をつくる会
- 12月21日 季節の展示コーナーを「正月の風景」に展示替え
- 二〇二五年
- 1月25日 神戸新聞文化センター歴史ウォーク(見学者一八名)

- 31日 東灘小学校三年生(見学者一二五名)
- 2月2日 季節の展示コーナーを「ひなまつり」に展示替え
- 13日 本山第三小学校三年生(見学者一三九名)
- 21日 福池小学校三年生(見学者九四名)
- 2月22日 日本女子大の佐々木陸摩氏が深山杲氏の調査
- 2月23日 地方史研究協議会兵庫大会の総括例会を深江会館で開催
- 3月29日 朝日放送「news おかえり なんでもやねん!」で史料館が紹介される

## 資料寄贈者ご芳名

(敬称略) 二〇二四年四月～二〇二五年三月

山田良子／岡山県立記録資料館／永田正和／尾崎伸之

(道谷 卓記)

◆杉浦昭典名誉館長が死去 杉浦名誉館長が二〇二四年七月二十五日、老衰のため死去した。九五歳。一九二八年生まれ、高等商船学校航海科卒業。神戸商船大学名誉教授。専門は帆船航海術史。神戸商船大学在職中から史料館理事を務め、一九九二年の退職後に館長に就任、二〇〇九年まで一七年間の長きにわたって館長を務めた。この間、一九九五年に阪神・淡路大震災に遭遇、館長として復旧の陣頭に立ち半年後に再開にこぎつけた。二〇二三年に瑞宝中綬章受章。

『生活文化史』 第53号 2025・3・31

編集／大国正美

発行／神戸深江生活文化史料館

〒658-0021 神戸市東灘区深江本町3-5-17

☎ 078-45314980

http://fukae-museum.la.coccan.jp/